



トラブルシューティング

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [一般的なトラブルシューティングとベスト プラクティス](#) (1 ページ)
- [FIPS モードの問題](#) (2 ページ)
- [認証に関する問題](#) (3 ページ)
- [オブジェクトのブロックに関する問題](#) (5 ページ)
- [ブラウザに関する問題](#) (5 ページ)
- [DNS に関する問題](#) (6 ページ)
- [フェールオーバーの問題](#) (6 ページ)
- [機能キーの期限切れ](#) (7 ページ)
- [FTP に関する問題](#) (7 ページ)
- [アップロード/ダウンロード速度の問題](#) (8 ページ)
- [ハードウェアに関する問題](#) (10 ページ)
- [HTTPS/復号化/証明書に関する問題](#) (11 ページ)
- [Identity Services Engine に関する問題](#) (13 ページ)
- [カスタム URL カテゴリおよび外部 URL カテゴリに関する問題](#) (17 ページ)
- [ロギングに関する問題](#) (19 ページ)
- [ポリシーに関する問題](#) (20 ページ)
- [ファイルレピュテーションとファイル分析に関する問題](#) (27 ページ)
- [リポートの問題](#) (27 ページ)
- [サイトへのアクセスに関する問題](#) (29 ページ)
- [アップストリームプロキシに関する問題](#) (30 ページ)
- [仮想アプライアンス](#) (31 ページ)
- [WCCP に関する問題](#) (32 ページ)
- [パケットキャプチャ](#) (32 ページ)
- [サポートの使用](#) (34 ページ)

一般的なトラブルシューティングとベスト プラクティス

以下のカスタム フィールドを含むようにアクセス ログを設定します。

%u、%g、%m、%k、%L（これらの値は大文字と小文字が区別されます）。

これらのフィールドの説明については、[アクセスログのフォーマット指定子と W3C ログファイルのフィールド](#) を参照してください。

設定の手順については、[アクセスログのカスタマイズ](#) および [ログサブスクリプションの追加および編集](#) を参照してください。

FIPS モードの問題

Secure Web Appliance を AsyncOS 10.5 にアップグレードして、FIPS モードおよび CSP 暗号化をイネーブルにした後に、暗号化と証明書に関する問題が発生した場合は、次の項目を確認してください。

- [CSP 暗号化（2 ページ）](#)
- [証明書の検証（2 ページ）](#)

CSP 暗号化

FIPS モードの CSP 暗号化がイネーブルになる前に動作していた機能が、暗号化がイネーブルになった後に動作しなくなった場合は、CSP 暗号化に問題があるかどうかを判別します。CSP 暗号化および FIPS モードをディセーブルにして、機能をテストします。動作する場合は、FIPS モードをイネーブルにして再びテストします。動作する場合は、CSP 暗号化をイネーブルにして再びテストします。[FIPS モードの有効化または無効化](#) を参照してください。

証明書の検証

AsyncOS 10.5 にアップグレードする前に Secure Web Appliance で受け入れられた証明書は、再アップロードしたときに、アップロード方法に関係なく拒否される可能性があります。（つまり、[HTTPS プロキシ (HTTPS Proxy)]、[証明書管理 (Certificate Management)]、[SaaS のアイデンティティプロバイダ (Identity Provider for SaaS)]、ISE 設定、認証設定などの UI ページを使用した場合も、certconfig CLI コマンドを使用した場合も）拒否されることがあります。

証明書の署名者 CA が「カスタムの信頼できる証明機関」として [証明書の管理 (Certificate Management)] ページ ([ネットワーク (Network)] > [証明書管理 (Certificate Management)]) ページで追加されていることを確認してください。証明書パス全体を信頼することができない場合は、証明書を Secure Web Appliance にアップロードできません。

また、古い設定をリロードすると、含まれている証明書が信頼されなくなって、リロードに失敗することがあります。保存された設定をロードする間に、これらの証明書を置き換えてください。



(注) すべての証明書検証エラーは、監査ログ (/data/pub/audit_logs/audit_log.current) に記録されます。

認証に関する問題

- [認証の問題のトラブルシューティング ツール \(3 ページ\)](#)
- [認証の失敗による通常動作への影響 \(3 ページ\)](#)
- [LDAP に関する問題 \(3 ページ\)](#)
- [基本認証に関する問題 \(4 ページ\)](#)
- [シングル サインオンに関する問題 \(4 ページ\)](#)
- 以下の項も参照してください。
 - [一般的なトラブルシューティングとベスト プラクティス \(1 ページ\)](#)
 - [HTTPS および FTP over HTTP 要求が、認証を必要としないアクセス ポリシーにのみ一致する \(22 ページ\)](#)
 - [認証をサポートしていない URL にアクセスできない \(29 ページ\)](#)
 - [クライアント要求がアップストリーム プロキシで失敗する \(30 ページ\)](#)

認証の問題のトラブルシューティング ツール

Kerberos チケットのキャッシュを表示および消去するための KerbTray または klist (どちらも Windows Server Resource Kit に付属)。Active Directory を表示および編集するための Active Directory Explorer。Wireshark は、ネットワークのトラブルシューティングに使用できるパケットアナライザです。

認証の失敗による通常動作への影響

一部のユーザーエージェントまたはアプリケーションは、認証に失敗してアクセスを拒否されると、Secure Web Appliance への要求の送信を繰り返します。その結果、マシン クレデンシャルを使用して、Active Directory サーバへの要求の送信が繰り返されるので、運用に悪影響を及ぼすことがあります。

最適な結果を得るには、これらのユーザーエージェントの認証をバイパスします。[問題のあるユーザー エージェントの認証のバイパス](#) を参照してください。

LDAP に関する問題

- [NTLMSSP に起因する LDAP ユーザーの認証の失敗 \(3 ページ\)](#)
- [LDAP 参照に起因する LDAP 認証の失敗 \(4 ページ\)](#)

NTLMSSP に起因する LDAP ユーザーの認証の失敗

LDAP サーバーは NTLMSSP をサポートしていません。一部のクライアントアプリケーション (Internet Explorer など) は、NTLMSSP と Basic の選択肢が与えられたときに、常に NTLMSSP を選択します。以下の条件がすべて該当する場合は、ユーザーの認証に失敗します。

- ユーザーが LDAP レルムにのみ存在する。
- 識別プロファイルで LDAP レルムと NTLM レルムの両方を含むシーケンスを使用している。
- 識別プロファイルで「基本または NTLMSSP」認証方式を使用している。
- ユーザーが Basic を介して NTLMSSP を選択するアプリケーションから要求を送信する。

上記の条件の少なくとも1つが該当する場合は、認証プロファイル、認証レルム、またはアプリケーションを再設定してください。

LDAP 参照に起因する LDAP 認証の失敗

以下の条件がすべて該当する場合は、LDAP 認証に失敗します。

- LDAP 認証レルムで Active Directory サーバーを使用している。
- Active Directory サーバーが別の認証サーバーへの LDAP 参照を使用している。
- 参照された認証サーバーが Secure Web Appliance で使用できない。

回避策：

- アプライアンスで LDAP 認証レルムを設定するときに、Active Directory フォレストにグローバル カタログ サーバー（デフォルトポートは 3268）を指定します。
- `advancedproxyconfig > authentication` CLI コマンドを使用して、LDAP 参照をディセーブルにします。デフォルトでは、LDAP 参照はディセーブルになります。

基本認証に関する問題

- [基本認証の失敗（4 ページ）](#)

関連する問題

- [アップストリーム プロキシが基本クレデンシャルを受け取らない（30 ページ）](#)

基本認証の失敗

基本認証方式を使用する場合、AsyncOS for Web では 7 ビット ASCII 文字のパスフレーズのみがサポートされます。パスフレーズに 7 ビット ASCII 以外の文字が含まれていると、基本認証は失敗します。

シングルサインオンに関する問題

- [エラーによりユーザーがクレデンシャルを要求される（5 ページ）](#)

エラーによりユーザーがクレデンシャルを要求される

Secure Web Applianceが WCCP v2 対応デバイスに接続されている場合、NTLM 認証が機能しないことがあります。透過 NTLM 認証を適切に実行しない、厳格にロックダウンされた Internet Explorer バージョンを使ってユーザーが要求を行っており、アプライアンスが WCCP v2 対応デバイスに接続されている場合、ブラウザはデフォルトで基本認証を使用します。その結果、認証クレデンシャルが不要な場合でも、ユーザーはクレデンシャルの入力を要求されます。

回避策

Internet Explorer で、[ローカルイントラネット] ゾーンの [信頼済みサイト] リストに Secure Web Applianceのリダイレクトホスト名を追加します ([ツール]>[インターネットオプション]>[セキュリティ]タブ)。

オブジェクトのブロックに関する問題

- [一部の Microsoft Office ファイルがブロックされない \(5 ページ\)](#)
- [DOS の実行可能オブジェクトタイプをブロックすると、Windows OneCare のアップデートがブロックされる \(5 ページ\)](#)

一部の Microsoft Office ファイルがブロックされない

[ブロックするオブジェクトタイプ (Block Object Type)] セクションで Microsoft Office ファイルをブロックすると、一部の Microsoft Office ファイルがブロックされない可能性があります。

すべての Microsoft Office ファイルをブロックする必要がある場合は、[ブロックする MIME タイプ (Block Custom MIME Types)] フィールドに **application/x-ole** を追加します。ただし、このカスタム MIME タイプをブロックすると、Visio ファイルや一部のサードパーティアプリケーションなど、すべての Microsoft 複合オブジェクトフォーマットタイプがブロックされます。

DOS の実行可能オブジェクトタイプをブロックすると、Windows OneCare のアップデートがブロックされる

DOS の実行可能オブジェクトタイプをブロックするように Secure Web Applianceを設定すると、Windows OneCare のアップデートがブロックされます。

ブラウザに関する問題

- [Firefox で WPAD を使用できない \(6 ページ\)](#)

Firefox で WPAD を使用できない

Firefox ブラウザが WPAD による DHCP ルックアップをサポートしていない可能性があります。最新の情報については、https://bugzilla.mozilla.org/show_bug.cgi?id=356831 を参照してください。

PAC ファイルが Secure Web Appliance にホストされている場合に、Firefox（または、DHCP をサポートしていない他のブラウザ）で WPAD を使用するには、ポート 80 を介して PAC ファイルを使用するようにアプライアンスを設定します。

-
- ステップ 1 [セキュリティサービス (Security Services)] > [Webプロキシ (Web Proxy)] を選択し、[プロキシを設定する HTTP ポート (HTTP Ports to Proxy)] フィールドからポート 80 を削除します。
 - ステップ 2 アプライアンスにファイルをアップロードする場合、PAC サーバーポートとしてポート 80 を使用します。
 - ステップ 3 ポート 80 の Web プロキシを指し示すようにブラウザが手動設定されている場合は、[プロキシを設定する HTTP ポート (HTTP Ports to Proxy)] フィールドで、別のポートを指し示すようにブラウザを再設定します。
 - ステップ 4 PAC ファイルのポート 80 への参照を変更します。
-

DNS に関する問題

- [アラート : DNS キャッシュのブートに失敗 \(Failed to bootstrap the DNS cache\) \(6 ページ\)](#)

アラート : DNS キャッシュのブートに失敗 (Failed to bootstrap the DNS cache)

アプライアンスのリポート時に、「DNS キャッシュのブートに失敗 (Failed to bootstrap the DNS cache)」というメッセージを含むアラートが生成された場合は、システムがプライマリ DNS サーバーに接続できなかったことを示しています。この事象は、ネットワーク接続が確立される前に DNS サブシステムがオンラインになった場合、ブートのタイミングで発生します。このメッセージが別のタイミングで表示された場合、ネットワーク問題が発生しているか、または DNS 設定で有効なサーバが指定されていないことを示しています。

フェールオーバーの問題

- [フェールオーバーの誤った設定 \(7 ページ\)](#)
- [仮想アプライアンスでのフェールオーバーに関する問題 \(7 ページ\)](#)

フェールオーバーの誤った設定

フェールオーバーグループを誤って設定すると、複数のプライマリプライアンスをもたらしたり、その他のフェールオーバーの問題が発生したりする可能性があります。failoverconfig CLI コマンドの testfailovergroup サブコマンドを使用して、フェールオーバーの問題を診断します。

次に例を示します。

```
wsa.wga> failoverconfig
Currently configured failover profiles:
1.      Failover Group ID: 61
        Hostname: failoverV4Pl.wga, Virtual IP: 10.4.28.93/28
        Priority: 100, Interval: 3 seconds
        Status: PRIMARY

Choose the operation you want to perform:
- NEW - Create new failover group.
- EDIT - Modify a failover group.
- DELETE - Remove a failover group.
- PREEMPTIVE - Configure whether failover is preemptive.
- TESTFAILOVERGROUP - Test configured failover profile(s)
[]> testfailovergroup
Failover group ID to test (-1 for all groups):
[]> 61
```

仮想プライアンスでのフェールオーバーに関する問題

仮想プライアンス上に展開している場合は、ハイパーバイザのインターフェイス/仮想スイッチが無差別モードを使用するように設定されていることを確認してください。

機能キーの期限切れ

(Webインターフェイスから) アクセスしようとしている機能の機能キーの有効期限が切れている場合は、シスコの担当者またはサポート組織までご連絡ください。

FTP に関する問題

- [URL カテゴリが一部の FTP サイトをブロックしない \(8 ページ\)](#)
- [大規模 FTP 転送の切断 \(8 ページ\)](#)
- [ファイルのアップロード後に FTP サーバーにゼロ バイト ファイルが表示される \(8 ページ\)](#)
- [Chrome ブラウザが FTP-over-HTTP 要求でユーザー エージェントとして検出されない \(8 ページ\)](#)
- 以下の項も参照してください。
 - [アップストリーム プロキシ経由で FTP 要求をルーティングできない \(30 ページ\)](#)
 - [HTTPS および FTP over HTTP 要求が、認証を必要としないアクセス ポリシーにのみ一致する \(22 ページ\)](#)

URL カテゴリが一部の FTP サイトをブロックしない

ネイティブ FTP 要求が FTP プロキシに透過的にリダイレクトされる場合、FTP サーバーに対するホスト名情報は含まれず、IP アドレス情報だけが含まれます。そのため、要求の宛先がこれらのサーバーである場合でも、ホスト名情報しか持っていない一部の定義済み URL カテゴリと Web レピュテーション フィルタが、ネイティブ FTP 要求と一致しなくなります。それらのサイトへのアクセスをブロックする場合は、サイトの IP アドレスを使用してサイト用のカスタム URL カテゴリを作成する必要があります。

大規模 FTP 転送の切断

FTP プロキシと FTP サーバーとの接続が遅い場合、特に、Cisco データセキュリティ フィルタがイネーブルのときに、大きなファイルのアップロードに時間がかかることがあります。そのため、FTP プロキシがファイル全体をアップロードする前に FTP クライアントがタイムアウトしてしまい、トランザクション失敗の通知を受け取る場合があります。しかし、トランザクションは失敗しておらず、バックグラウンドで続行され、FTP プロキシによって完了されます。

FTP クライアントのアイドルタイムアウト値を適切に増加することにより、この問題を回避できます。

ファイルのアップロード後に FTP サーバーにゼロバイトファイルが表示される

発信マルウェア対策スキャンによって FTP プロキシがアップロードをブロックすると、FTP クライアントは FTP サーバー上にゼロバイト ファイルを作成します。

Chrome ブラウザが FTP-over-HTTP 要求でユーザー エージェントとして検出されない

FTP-over-HTTP 要求では、Chrome ブラウザはユーザー エージェント文字列を含まないためユーザー エージェントとして検出されません。

アップロード/ダウンロード速度の問題

Secure Web Appliance は、数千ものクライアントとサーバーの接続を並行して処理するように設計されています。また、送信/受信バッファのサイズは安定性を犠牲にすることなく、最適なパフォーマンスを実現するように設定されています。通常、実際の用途は、多数の一時的な接続で構成されたブラウザトラフィックです。これには受信パケットステアリング (RPS) データと受信フローステアリング (RFS) データが含まれ、Secure Web Appliance が最適化されています。

ただし、プロキシ経由で大容量ファイルを転送する場合などは、アップロードまたはダウンロード速度が著しく低下することがあります。たとえば、10Mbpsの回線でSecure Web Applianceを通じて100MBのファイルをダウンロードすると、サーバーからファイルを直接ダウンロードするよりも約7～8倍の時間がかかる可能性があります。

大容量ファイル転送が多数行われる特異な環境では、この問題を改善するためにnetworktuningコマンドを使用して送信/受信バッファのサイズを増やすことができますが、そうするとネットワークメモリが枯渇してシステムの安定性に影響が生じる可能性もあります。networktuningコマンドの詳細については、[Secure Web Appliance CLI コマンド](#)を参照してください。



注意 TCP 受信/送信バッファ制御ポイントとその他のTCP バッファ パラメータを変更する場合は、注意が必要です。副次的な影響を理解している場合にのみ、networktuning コマンドを使用してください。

networktuning でバッファサイズを構成するには、networktuning で提供される自動送受信オプションを有効にしていることを確認してください。

ここでは、2つの異なるアプライアンスでの networktuning コマンドの使用について説明します。

S380 の場合

```
networktuning
sendspace = 131072
recvspace = 131072
send-auto = 1 [Remember to disable miscellaneous > advancedproxy > send buf auto tuning]
recv-auto = 1 [Remember to disable miscellaneous > advancedproxy > recv buf auto tuning]
mbuf clusters = 98304 * (X/Y) where is X is RAM in GBs on the system and Y is 4GB.
sendbuf-max = 1048576
recvbuf-max = 1048576
```

質問

これらのパラメータは何ですか。

Secure Web Applianceには、固有のニーズに合わせて変更できる複数のバッファと最適化アルゴリズムがあります。バッファサイズは、「最も一般的な」導入シナリオに合わせて初めから最適化されています。ただし、より高速の接続ごとのパフォーマンスが必要な場合に大きいバッファサイズを使用できますが、全体的なメモリ使用量が増加します。そのため、バッファサイズの増加は、システムで使用可能なメモリの範囲内にする必要があります。送信/受信スペース変数は、ソケット経由の通信用にデータを保存するために使用できるバッファサイズを制御します。自動送信/受信オプションを使用して、送信/受信TCPウィンドウサイズの動的スケールリングを有効および無効にします（これらのパラメータは、FreeBSD カーネルに適用されます）。

これらの例の値はどのように決定されましたか。

この「問題」が発生したお客様のネットワークでさまざまな値のセットをテストして、これらの値に絞りました。その後、シスコのラボで安定性の変化とパフォーマンスの向上についてさらにテストしました。自己責任で、これら以外の値を自由に使用できます。

なぜ、これらの値はデフォルトではないのですか。

前述のとおり、デフォルトで Secure Web Applianceは最も一般的な導入向けに最適化され、また、非常に多くの場所で動作する際に接続ごとのパフォーマンスに不満がないように最適化されています。ここで説明した変更を行うと、RPS数は増加せず、実際には低下する可能性があります。

ハードウェアに関する問題

- [アプライアンスの電源の再投入](#) (10 ページ)
- [アプライアンスの状態およびステータス インジケータ](#) (10 ページ)
- [アラート：380または680ハードウェアでバッテリー再学習タイムアウト \(RAID イベント\) \(Battery Relearn Timed Out \(RAID Event\) on 380 or 680 Hardware\)](#) (10 ページ)

アプライアンスの電源の再投入

重要x80 または x90 アプライアンスの電源を再投入する場合は、アプライアンスが起動するまで (すべての LED が緑色になるまで) 少なくとも 20 分間待ってから、電源ボタンを押してください。

アプライアンスの状態およびステータス インジケータ

ハードウェア アプライアンスの前面/背面パネルのライトは、アプライアンスの状態およびステータスを示します。これらのインジケータの説明については、『Cisco x90 Series Content Security Appliances *Installation and Maintenance Guide*』など、<http://www.cisco.com/c/en/us/support/security/web-security-appliance/products-installation-guides-list.html> [英語] から入手可能なハードウェア ガイドを参照してください。

温度範囲など、アプライアンスの仕様についてもこれらのマニュアルで確認できます。

アラート：380または680ハードウェアでバッテリー再学習タイムアウト (RAID イベント) (Battery Relearn Timed Out (RAID Event) on 380 or 680 Hardware)

このアラートは、問題を示している場合と示していない場合があります。バッテリー再学習タイムアウト自体は、RAID コントローラに問題があることを示すものではありません。コントローラは、後続の再学習で回復します。以降 48 時間他の RAID アラートに関する電子メールを監視して、この問題が他の問題の副作用ではないことを確認してください。システムから他の RAID タイプのアラートが示されない場合は、この警告を無視してかまいません。

HTTPS/復号化/証明書に関する問題

- [URL カテゴリ基準を使用しているルーティングポリシーによる HTTPS サイトへのアクセス \(11 ページ\)](#)
- [HTTPS 要求の失敗 \(11 ページ\)](#)
- [特定 Web サイトの復号化のバイパス \(12 ページ\)](#)
- [埋め込み/参照コンテンツのブロックの例外に対する条件および制約事項 \(12 ページ\)](#)
- [アラート：セキュリティ証明書に関する問題 \(Problem with Security Certificate\) \(13 ページ\)](#)
- 以下の項も参照してください。
 - [HTTPS トランザクションのログイン \(19 ページ\)](#)
 - [HTTPS に対してアクセス ポリシーを設定できない \(21 ページ\)](#)
 - [HTTPS および FTP over HTTP 要求が、認証を必要としないアクセス ポリシーにのみ一致する \(22 ページ\)](#)

URL カテゴリ基準を使用しているルーティングポリシーによる HTTPS サイトへのアクセス

透過的にリダイレクトされた HTTPS 要求の場合、Web プロキシは宛先サーバーとやり取りして、サーバー名とサーバーが属する URL カテゴリを判別する必要があります。したがって、Web プロキシがルーティングポリシーグループのメンバーシップを評価する時点では、まだ宛先サーバーとやり取りしていないので、HTTPS 要求の URL カテゴリが不明です。Web プロキシが URL カテゴリを認識していない場合、情報が不足しているために透過的 HTTPS 要求をユーザー定義のルーティングポリシーと一致させることはできません。

その結果、どのルーティングポリシーグループにも、どの識別プロファイルにもメンバーシップ基準がない場合は、透過的にリダイレクトされる HTTPS トランザクションのみがルーティングポリシーと一致します。ユーザー定義のルーティングポリシーまたは識別プロファイルが URL カテゴリ単位でメンバーシップを定義している場合は、透過的 HTTPS トランザクションはデフォルトのルーティングポリシーグループと一致します。

HTTPS 要求の失敗

- [IP ベースのサロゲートと透過的要求を含む HTTPS \(11 ページ\)](#)
- [カスタムおよびデフォルトカテゴリの異なるクライアントの「Hello」動作 \(12 ページ\)](#)

IP ベースのサロゲートと透過的要求を含む HTTPS

HTTPS 要求が、以前の HTTP 要求の認証情報を利用できないクライアントから発信された場合、AsyncOS は HTTPS プロキシの設定に応じて、HTTPS 要求に失敗するか、またはユーザーを認証するために HTTPS 要求を復号化します。この動作を定義するには、[セキュリティサー

ピス (Security Services)] > [HTTPS プロキシ (HTTPS Proxy)] ページで [HTTPS 透過的要求 (HTTPS Transparent Request)] 設定を使用します。「復号化ポリシー」のトピックの「HTTPS プロキシの有効化」に関する項を参照してください。

カスタムおよびデフォルト カテゴリの異なるクライアントの「Hello」動作

パケット キャプチャをスキャンすると、カスタム カテゴリおよびデフォルト (Web) カテゴリの HTTPS 復号化パススルー ポリシーに対して別々の時間で「Client Hello」ハンドシェイクが送信されます。

デフォルト カテゴリを介した HTTPS ページのパススルーでは、要求元から Client Hello を受信する前に Client Hello が送信され、接続が失敗します。カスタム URL カテゴリを介した HTTPS ページのパススルーでは、要求元から Client Hello を受信した後に Client Hello が送信され、接続が成功します。

対応策として、SSL 3.0 のみと互換性がある Web ページのパススルー アクションを使用して、カスタム URL カテゴリを作成することができます。

特定 Web サイトの復号化のバイパス

HTTPS サーバーへのトラフィックが、Web プロキシなどのプロキシサーバーによって復号化されると、一部の HTTPS サーバーは期待どおりに機能しなくなります。たとえば、セキュリティの高い銀行のサイトなど、一部の Web サイトとそれらに関連する Web アプリケーションおよびアプレットは、オペレーティングシステムの証明書ストアを使用するのではなく、信頼できる証明書のハードコードされたリストを維持します。

すべてのユーザーがこれらのタイプのサイトにアクセスできるようにするには、これらのサーバーへの HTTPS トラフィックの復号化をバイパスします。

ステップ 1 拡張プロパティを設定して、影響を受ける HTTPS サーバーを含むカスタム URL カテゴリを作成します。

ステップ 2 メンバーシップの一環としてステップ 1 で作成されたカスタム URL カテゴリを使用する復号化ポリシーを作成し、カスタム URL カテゴリに対するアクションを [通過 (Pass Through)] に設定します。

埋め込み/参照コンテンツのブロックの例外に対する条件および制約事項

Referer ベースの例外は、アクセス ポリシーでのみサポートされます。HTTPS トラフィックでこの機能を使用するには、アクセス ポリシーで例外を定義する前に、例外用に選択する URL カテゴリの HTTPS 復号化を設定する必要があります。ただし、この機能は特定の条件下では機能しません。

- 接続がトンネル化されていて HTTPS 復号化が有効になっていない場合、この機能は HTTPS サイトに発行される要求に対して機能しません。

- RFC 2616 に従って、ブラウザクライアントにはオープンに/匿名で参照するためのトグルスイッチが用意されている場合があります。これによって、Referer および参照元情報の送信をそれぞれ有効/無効にすることができます。この機能は Referer ヘッダーのみに依存しており、それらの送信をオフにするとこの機能は使用できなくなります。
- RFC 2616 に従って、参照元ページがセキュアなプロトコルで転送された場合、クライアントには（セキュアでない）HTTP 要求の Referer ヘッダー フィールドは含まれません。そのため、HTTPS ベースのサイトから HTTP ベースのサイトに対するすべての要求には Referer ヘッダーが含まれず、この機能は期待どおりに動作しません。
- 番号ポリシーが設定されている場合（カスタムカテゴリが番号ポリシーと一致する場合やアクションがドロップに設定されている場合など）、そのカテゴリのすべての着信要求はドロップされ、バイパスは実行されません。

アラート：セキュリティ証明書に関する問題（Problem with Security Certificate）

通常、アプライアンスで生成またはアップロードされるルート証明書情報は、信頼できるルート認証局としてクライアントアプリケーションで認識されません。ユーザーが HTTPS 要求を送信すると、大部分の Web ブラウザでは、デフォルトで、Web サイトのセキュリティ証明書に問題があることを知らせる警告メッセージがクライアントアプリケーションによって表示されます。通常、エラーメッセージには、Web サイトのセキュリティ証明書が信頼できる認証局によって発行されていないこと、または Web サイトが未知の認証局によって認証されていることが表示されます。クライアントアプリケーションによっては、この警告メッセージがユーザーに示されず、ユーザーは承認されない証明書を受け入れることができません。



- (注) **Mozilla Firefox ブラウザ**：Mozilla Firefox ブラウザで使用するには、アップロードする証明書に「basicConstraints=CA:True」を含める必要があります。この制約により、Firefox は、信頼されたルート認証局としてルート証明書を認識できるようになります。

Identity Services Engine に関する問題

- [ISE 問題のトラブルシューティング ツール](#)（13 ページ）
- [ISE サーバーの接続に関する問題](#)（14 ページ）
- [ISE 関連の重要なログ メッセージ](#)（16 ページ）

ISE 問題のトラブルシューティング ツール

以下のツールは、ISE 関連の問題をトラブルシューティングする際に役立ちます。

- ISE テスト ユーティリティ。ISE サーバーへの接続のテストに使用され、貴重な接続関連情報を提供します。これは、[Identity Services Engine] ページの [テスト開始 (Start Test)] オプションです ([ISE/ISE-PIC サービスへの接続](#)を参照)。
- ISE および プロキシ ログ (以下を参照)。[ログによるシステムアクティビティのモニター](#)
- ISE 関連の CLI コマンド `iseconfig` および `isedata`。特に `isedata` は、セキュリティ グループ タグ (SGT) のダウンロードを確認するために使用します。詳細については、[Secure Web Appliance CLI コマンド](#)を参照してください。
- Web トラッキング機能およびポリシー トレース機能。これらを使用してポリシーの一致に関する問題をデバッグできます。たとえば、許可されるべきユーザーがブロックされた場合 (または、その逆の場合) などに使用できます。詳細については、[ポリシーのトラブルシューティング ツール：ポリシー トレース \(23 ページ\)](#) を参照してください。
- [パケットキャプチャ \(32 ページ\)](#) ([サポートの使用 \(34 ページ\)](#) する場合)
- 認証ステータスを確認する場合は、`openssl Online Certificate Status Protocol (ocsp)` ユーティリティを使用できます。これは <https://www.openssl.org/> から入手できます。

ISE サーバーの接続に関する問題

証明書の問題

Secure Web Appliance と ISE サーバーは証明書を使用して正常な接続を相互認証します。したがって、一方のエンティティによって指定された各証明書を、もう一方が認識できなければなりません。たとえば、Secure Web Appliance のクライアント証明書が自己署名の場合、該当する ISE サーバーの信頼できる証明書リストに同じ証明書が含まれている必要があります。同様に、Web Appliance クライアント証明書が CA 署名付きの場合も、該当する ISE サーバーにその CA ルート証明書が存在している必要があります。同様の要件は、ISE サーバー関連の管理証明書および pxGrid 証明書にも該当します。

証明書の要件およびインストールについては、[Identity Services Engine \(ISE\) / ISE パッシブ ID コントローラ \(ISE-PIC\) サービスの概要](#) で説明されています。証明書関連の問題が発生した場合は、以下を確認してください。

- CA 署名付き証明書を使用する場合：
 - 管理証明書および pxGrid 証明書のルート CA 署名証明書が Secure Web Appliance に存在していることを確認します。
 - Web Appliance クライアント証明書のルート CA 署名証明書が ISE サーバーの信頼できる証明書リストに含まれていることを確認します。
- 自己署名証明書を使用する場合：
 - (Secure Web Appliance で生成され、ダウンロードされた) Web Appliance クライアント証明書が ISE サーバーにアップロードされていること、および ISE サーバーの信頼できる証明書リストに含まれていることを確認します。

- (ISE サーバーで生成され、ダウンロードされた) ISE 管理者証明書および pxGrid 証明書が Secure Web Appliance にアップロードされていること、およびこのアプライアンスの証明書リストに含まれていることを確認します。
- 期限切れの証明書 :
 - アップロード時に有効だった証明書が、期限切れでないことを確認します。

証明書の問題を示すログ出力

以下の ISE サービス ログの抜粋は、証明書の欠落または無効な証明書による接続タイムアウトを示しています。

```
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Debug: ISELoggerThread: Logging queue starting
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Info: ISEService: Successfully loaded configuration from: /data/ise/ise_se
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Debug: Statistics loaded from file
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Info: ISEService: RPC Server Socket :/tmp/ise_fastrpc.sock
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Info: RPCServer: Starting at: /tmp/ise_fastrpc.sock
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Info: ISEService: Running
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Debug: ISEEngineManager: Creating ISE client attempt 0
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Debug: ISEEngineManager: Creating ISE connection with reconnection True
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Info: ISEService: Sending ready signal...
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Info: ISEDynamicConfigThread: Started Server..
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Debug: ISEEngineManager: Successfully created ISE client
Tue Mar 24 03:56:14 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 0 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:17 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 3 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:20 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 6 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:23 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 9 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:26 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 12 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:29 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 15 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:32 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 18 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:35 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 21 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:38 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 24 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:41 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 27 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:44 2015 Trace: ISEEngineManager: Waiting for client connection, 30 seconds of 30
Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEEngineManager: Waiting for client connection timed out
Tue Mar 24 03:56:47 2015 Debug: ISEEngineManager: Stopping client...
```

Secure Web Appliance のこれらのトレースレベルログエントリは、30 秒後に ISE サーバーへの接続の試行が終了されることを示しています。

ネットワークの問題

Identity Services Engine (ISE/ISE-PIC サービスへの接続) で [テスト開始 (Start Test)] を実行中に ISE サーバーへの接続が失敗した場合、ポート 443 と 5222 に設定されている ISE サーバーへの接続を確認します。

ポート 5222 は公式のクライアント/サーバー Extensible Messaging and Presence Protocol (XMPP) ポートであり、ISE サーバーへの接続に使用されます。また、Jabber や Google Talk などのアプリケーションでも使用されます。ただし、一部のファイアウォールはポート 5222 をブロックするように設定されています。

接続の確認に使用できるツールには、tcpdump などがあります。

ISE サーバーの接続に関するその他の問題

Secure Web Applianceが ISE サーバーへの接続を試みたときに、以下の問題によって失敗することがあります。

- ISE サーバーのライセンスの期限が切れている。
- ISE サーバーの [管理 (Administration)] > [pxGrid サービス (pxGrid Services)] ページで、pxGrid ノードのステータスが [未接続 (not connected)] になっている。このページで [自動登録の有効化 (Enable Auto-Registration)] がオンになっていることを確認してください。
- 失効した Secure Web Appliance クライアント (特に「test_client」または「pxgrid_client」) が、ISE サーバー上に存在する。これらは削除する必要があります。ISE サーバーの [管理 (Administration)] > [pxGrid サービス (pxGrid Services)] > [クライアント (Clients)] を参照してください。
- すべてのサービスが起動して実行される前に、Secure Web Applianceが ISE サーバーへの接続を試みている。

ISE サーバーに対する一部の変更 (証明書のアップデートなど) では、ISE サーバーまたはそこで実行されているサービスの再起動が必要です。この間に ISE サーバーへの接続を試みると失敗しますが、最終的に接続に成功します。

ISE 関連の重要なログメッセージ

ここでは、Secure Web Applianceにおける ISE 関連の重要なログメッセージについて説明します。

- Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEEngineManager: Waiting for client connection timed out
Secure Web Applianceの ISE プロセスが 30 秒以内に ISE サーバーに接続できませんでした。
- Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEEngineManager: WSA Client cert/key missing. Please check ISE config
Web Appliance クライアント証明書とキーが Secure Web Applianceの [Identity Service Engine] 設定ページでアップロードされなかったか、生成されませんでした。
- Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEEngineManager: ISE service exceeded maximum allowable disconnect duration with ISE server
Secure Web Applianceの ISE プロセスが 120 秒以内に ISE サーバーに接続できず、終了しました。
- Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEEngineManager: Subscription to updates failed ...

Secure Web Applianceの ISE プロセスが、アップデートのために ISE サーバーに登録できませんでした。

- Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEEngineManager: Could not create ISE client: ...

ISE サーバー接続用に Secure Web Applianceの ISE クライアントを作成するときに、内部エラーが発生しました。

- Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEEngineManager: Bulk Download thread failed: ...

この内部エラーは、接続または再接続時に SGT の一括ダウンロードに失敗したことを示しています。

- Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEService: Unable to start service. Error: ...

Secure Web Applianceの ISE サービスの起動に失敗しました。

- Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEService: Unable to send ready signal ...

Secure Web Applianceの ISE サービスが heimdall に Ready 信号を送信できませんでした。

- Tue Mar 24 03:56:47 2015 Critical: ISEService: Unable to send restart signal ...

Secure Web Applianceの ISE サービスが heimdall に再起動信号を送信できませんでした。

カスタム URL カテゴリおよび外部 URL カテゴリに関する問題

- [外部ライブ フィード ファイルのダウンロードに関する問題 \(17 ページ\)](#)
- [.CSV ファイルの IIS サーバでの MIME タイプに関する問題 \(18 ページ\)](#)
- [コピーアンドペーストの後にフィード ファイルの形式が不正になる \(19 ページ\)](#)

外部ライブ フィード ファイルのダウンロードに関する問題

カスタムおよび外部 URL カテゴリを作成および編集し、[外部ライブ フィード (External Live Feed)] ファイル ([シスコ フィード形式 (Cisco Feed Format)] または [Office 365 フィード形式 (Office 365 Feed Format)] のいずれか) を提供する場合、[ファイルの取得 (Get File)] ボタンをクリックして、指定したサーバとの接続を開始し、ファイルをダウンロードして解析する必要があります。このプロセスの進行状況と結果が表示されます。エラーが発生した場合は、進行状況と結果が説明されます。問題を修正し、もう一度ファイルのダウンロードを試します。

次の 4 種類のエラーが発生する可能性があります。

- 接続の例外

Failed to resolve server hostname : フィードファイルの場所として指定した URL は無効です。この問題を解決するには、正しい URL を指定します。

- プロトコルエラー

Authentication failed due to invalid credentials : サーバ認証が失敗しました。サーバ接続に適切なユーザ名とパスワードを指定します。

The requested file is not found on the server : フィードファイルに指定した URL が無効なりソースを示しています。指定したサーバで正しいファイルが使用できることを確認します。

- コンテンツ検証エラー

Failed to validate the content of the field : フィードファイルのコンテンツが無効です。

- 解析エラー

- シスコフィード形式 .csv ファイルは、1 つ以上のエントリを含む必要があります。各エントリはサイトのアドレスまたは有効な正規表現文字列で、カンマ、アドレスタイプ (site または regex のいずれか) が続きます。フィードファイルのエントリに対してこの表記規則に従わない場合、解析エラーがスローされます。

また、http:// または https:// を site エントリの一部としてファイルに含めないでください。エラーが発生します。つまり、www.example.com は正しく解析されますが、http://www.example.com ではエラーが発生します。

- Microsoft サーバから取得した XML ファイルは、標準の XML パーサーによって解析されます。XML タグging の矛盾にも、解析エラーとしてフラグが付きます。

解析エラーの行番号はログに含まれます。次に例を示します。

Line 8: 'www.anyurl.com' - Line is missing address or address-type field. フィードファイルの 8 行目には、有効なアドレスまたは正規表現のパターン、またはアドレスタイプは含まれていません。

Line 12: 'www.test.com' - Unknown address type. 12 行目に無効なアドレスタイプがあります。アドレスタイプは site または regex のいずれかになります。

.CSV ファイルの IIS サーバでの MIME タイプに関する問題

カスタムおよび外部 URL カテゴリの作成および編集に [External Live Feed Category (外部ライブフィードファイルカテゴリ)] > [Cisco Feed Format (シスコフィード形式)] オプションの .csv ファイルを提供すると、シスコフィード形式サーバがインターネットインフォメーションサービス (IIS) のバージョン 7 または 8 ソフトウェアを実行している場合にファイルを取得する際、[406 not acceptable (406 受け入れられません)] エラーが発生する場合があります。同様に、feedsd ログでは次のような内容が報告されます。31 May 2016 16:47:22 (GMT +0200)
Warning: Protocol Error: 'HTTP error while fetching file from the server'.

これは、IIS 上の .csv ファイルのデフォルトの MIME タイプが `text/csv` ではなく `application/csv` であるためです。この問題は、IIS サーバにログインし、.csv ファイルの MIME タイプのエントリを `text/csv` に編集することで解決できます。

コピーアンドペーストの後にフィードファイルの形式が不正になる

UNIX または OS X システムから Windows システムに .csv (テキスト) フィードファイルのコンテンツをコピーアンドペーストする場合、余分な改行 (`\r`) が自動的に追加され、フィードファイルの形式が不正になる場合があります。

.csv ファイルを手動で作成する場合や、SCP、FTP、または POST を使用して UNIX または OS X から Windows システムにファイルを転送する場合は、問題はありません。

ロギングに関する問題

- [アクセスログエントリにカスタム URL カテゴリが表示されない \(19 ページ\)](#)
- [HTTPS トランザクションのロギング \(19 ページ\)](#)
- [アラート：生成データのレートを維持できない \(Unable to Maintain the Rate of Data Being Generated\) \(20 ページ\)](#)
- [W3C アクセスログでサードパーティ製ログアナライザツールを使用する場合の問題 \(20 ページ\)](#)

アクセスログエントリにカスタム URL カテゴリが表示されない

Web アクセスポリシーグループに、[モニター (Monito)] に設定されたカスタム URL カテゴリセットとその他のコンポーネント (Web レピュテーションフィルタ、DVS エンジンなど) がある場合に、カスタム URL カテゴリ内の URL に対する要求を許可するかブロックするかについて最終決定が行われると、要求のアクセスログエントリには、カスタム URL カテゴリの代わりに、定義済みの URL カテゴリが表示されます。

HTTPS トランザクションのロギング

アクセスログでの HTTPS トランザクションの表示は、HTTP トランザクションと似ていますが、特性は少し異なります。記録される内容は、トランザクションが HTTPS プロキシに明示的に送信されるか、または透過的にリダイレクトされるかどうかによって異なります。

- **TUNNEL**。これは、HTTPS 要求が HTTPS プロキシに透過的にリダイレクトされたときにアクセスログに記録されます。
- **CONNECT**。これは、HTTPS 要求が HTTPS プロキシに明示的に送信されたときにアクセスログに記録されます。

HTTPS トラフィックが復号化されたときは、アクセスログにトランザクションに対して、以下の 2 つのエントリが含まれます。

- TUNNEL または CONNECT が、処理された要求のタイプに応じて記録されます。

- HTTP 方式および復号化された URL。例：「GET https://ftp.example.com」。

完全な URL は、HTTPS プロキシがトラフィックを復号化するときだけ表示されます。

アラート：生成データのレートを維持できない (Unable to Maintain the Rate of Data Being Generated)

内部ロギングプロセスがフルバッファにより Web トランザクションイベントをドロップする場合、AsyncOS for Web が設定されたアラート受信者にクリティカルな電子メールメッセージを送信します。

デフォルトでは、Web プロキシが非常に高い負荷を受けたときに、内部ロギングプロセスは Web プロキシの負荷を減らす際にそれらを記録するイベントをバッファします。ロギングバッファファイルが完全に満杯になったときに、Web プロキシはトラフィックの処理を続行しますが、ロギングプロセスはイベントの一部をアクセスログまたは Web トラッキングレポートに記録しません。これは、Web トラフィックのスパイク時に発生する可能性があります。

ただし、アプライアンスが持続的に過剰容量になっている場合にも、ロギングバッファが満杯になることがあります。AsyncOS for Web は、ロギングプロセスがデータをドロップしなくなるまで、数分ごとにクリティカルな電子メールメッセージを送信し続けます。

クリティカルなメッセージは以下のようなテキストが含まれます。

```
Reporting Client: The reporting system is unable to maintain the rate of data being generated. Any new data generated will be lost.
```

AsyncOS for Web が、このクリティカルなメッセージを継続的または頻繁に送信する場合、アプライアンスは過剰容量になっている可能性があります。Secure Web Applianceの容量を追加する必要があるかどうかを確認するには、シスコカスタマーサポートにお問い合わせください。

W3C アクセス ログでサードパーティ製ログアナライザツールを使用する場合の問題

サードパーティ製のログアナライザツールを使用して、W3C アクセスログを閲覧したり解析する場合は、状況に応じて [タイムスタンプ (timestamp)] フィールドを含める必要があります。W3C の [タイムスタンプ (timestamp)] フィールドには、UNIX エポック以降の時間が表示され、ほとんどのログアナライザはこの形式の時間のみ認識します。

ポリシーに関する問題

- [HTTPS に対してアクセスポリシーを設定できない \(21 ページ\)](#)
- [オブジェクトのブロックに関する問題 \(5 ページ\)](#)
- [識別プロファイルがポリシーから削除される \(21 ページ\)](#)
- [ポリシーの照合に失敗 \(22 ページ\)](#)

- [ポリシーのトラブルシューティング ツール：ポリシー トレース \(23 ページ\)](#)
- 次のセクションも参照してください。 [URL カテゴリ基準を使用しているルーティング ポリシーによる HTTPS サイトへのアクセス \(11 ページ\)](#)

HTTPS に対してアクセス ポリシーを設定できない

HTTPS プロキシをイネーブルにすると、すべての HTTPS ポリシー決定が復号化ポリシーによって処理されます。また、アクセスおよびルーティング ポリシー グループ メンバーシップを HTTPS で定義することも、HTTPS トランザクションをブロックするようにアクセス ポリシーを設定することもできなくなります。

アクセスおよびルーティング ポリシー グループの一部のメンバーシップが HTTPS によって定義されており、一部のアクセス ポリシーが HTTPS をブロックする場合は、HTTPS プロキシをイネーブルにすると、それらのアクセスおよびルーティング ポリシー グループがディセーブルになります。ポリシーは、いつでもイネーブルにすることができますが、そうすると、HTTPS 関連の設定がすべて削除されます。

オブジェクトのブロックに関する問題

- [一部の Microsoft Office ファイルがブロックされない \(5 ページ\)](#)
- [DOS の実行可能オブジェクトタイプをブロックすると、Windows OneCare のアップデートがブロックされる \(5 ページ\)](#)

一部の Microsoft Office ファイルがブロックされない

[ブロックするオブジェクトタイプ (Block Object Type)]セクションで Microsoft Office ファイルをブロックすると、一部の Microsoft Office ファイルがブロックされない可能性があります。

すべての Microsoft Office ファイルをブロックする必要がある場合は、[ブロックする MIME タイプ (Block Custom MIME Types)]フィールドに **application/x-ole** を追加します。ただし、このカスタム MIME タイプをブロックすると、Visio ファイルや一部のサードパーティ アプリケーションなど、すべての Microsoft 複合オブジェクトフォーマットタイプがブロックされます。

DOS の実行可能オブジェクトタイプをブロックすると、Windows OneCare のアップデートがブロックされる

DOS の実行可能オブジェクトタイプをブロックするように Secure Web Applianceを設定すると、Windows OneCare のアップデートがブロックされます。

識別プロファイルがポリシーから削除される

識別プロファイルをディセーブルにすると、その識別プロファイルは関連するポリシーから削除されます。識別プロファイルがイネーブルになっていることを確認し、再びポリシーに追加します。

ポリシーの照合に失敗

- [ポリシーが適用されない \(22 ページ\)](#)
- [HTTPS および FTP over HTTP 要求が、認証を必要としないアクセス ポリシーにのみ一致する \(22 ページ\)](#)
- [HTTPS 要求および FTP over HTTP 要求の場合にユーザーがグローバル ポリシーに一致 \(23 ページ\)](#)
- [ユーザーに誤ったアクセス ポリシーが割り当てられる \(23 ページ\)](#)

ポリシーが適用されない

複数の識別プロファイルの基準が同じである場合、AsyncOS は一致する最初の識別プロファイルにトランザクションを割り当てます。したがって、トランザクションはその他の同じ基準の識別プロファイルとは照合されず、以降の同じ基準の識別プロファイルに適用されるポリシーは照合も適用もされません。

HTTPS および FTP over HTTP 要求が、認証を必要としないアクセス ポリシーにのみ一致する

クレデンシャルの暗号化がイネーブルの場合は、サロゲートとして IP アドレスを使用するようにアプライアンスを設定する必要があります。

クレデンシャルの暗号化がイネーブルになっており、サロゲート タイプとして Cookie を使用するように設定されている場合、認証は HTTPS 要求や FTP over HTTP 要求で機能しません。クレデンシャルの暗号化がイネーブルの場合、Web プロキシは HTTPS 接続を使用して、クライアントを認証のために Web プロキシ自体にリダイレクトするからです。認証が成功した後、Web プロキシは元の Web サイトにクライアントをリダイレクトします。ユーザーの識別を続行するために、Web プロキシはサロゲート (IP またはクッキー) を使用する必要があります。ただし、要求が HTTP または FTP over HTTP を使用している場合、Cookie を使用してユーザーを追跡すると、以下の動作が引き起こされます。

- **HTTPS。** Web プロキシは、復号化ポリシーを割り当てる前にユーザーのアイデンティティを解決 (したがって、トランザクションを復号化) する必要がありますが、トランザクションを復号化しない限り、Cookie を取得してユーザーを識別することはできません。
- **FTP over HTTP。** FTP over HTTP を使用して FTP サーバーにアクセスする場合のジレンマは、HTTPS サイトにアクセスする場合と同様です。Web プロキシは、アクセス ポリシーを割り当てる前にユーザーのアイデンティティを解決する必要がありますが、FTP トランザクションから Cookie を設定できません。

したがって、HTTP 要求と FTP over HTTP 要求は、認証を必要としないアクセス ポリシーとのみ一致します。通常、これらの要求は、認証を必要としないグローバル アクセス ポリシーに一致します。

HTTPS 要求および FTP over HTTP 要求の場合にユーザーがグローバル ポリシーに一致

アプライアンスがクッキーベースの認証を使用する場合、Web プロキシは、HTTP 要求を介した HTTPS および FTP のクライアントからクッキー情報を取得しません。このため、クッキーからユーザー名を取得できません。

HTTPS 要求や FTP over HTTP 要求は、他のメンバーシップ基準に従って識別プロファイルと照合されますが、識別プロファイルで認証が必要な場合でも、Web プロキシはクライアントに認証を要求しません。代わりに、Web プロキシはユーザー名を NULL に設定し、ユーザーを未認証と見なします。

その後、ポリシーと照合して評価される際に、未認証の要求は [すべての ID (All Identities)] を指定しているポリシーとのみ一致し、[すべてのユーザー (All Users)] が適用されます。通常、これはグローバル アクセス ポリシーなどのグローバル ポリシーです。

ユーザーに誤ったアクセス ポリシーが割り当てられる

- ネットワーク上のクライアントが、ネットワーク接続状態インジケータ (NCSI) を使用している。
- Secure Web Appliance が NTLMSSP 認証を使用している。
- 識別プロファイルが IP ベースのサロゲートを使用している。

ユーザーは自分のクレデンシャルではなく、マシンクレデンシャルを使用して識別され、その結果、誤ったアクセス ポリシーが割り当てられる場合があります。

回避策：

マシンクレデンシャルのサロゲート タイムアウト値を小さくします。

ステップ 1 `advancedproxyconfig > authentication` CLI コマンドを使用します。

ステップ 2 マシンクレデンシャルのサロゲート タイムアウトを入力します。

ポリシーのパラメータを変更した後のポリシー トレースの不一致

[アクセスポリシー (Access Policy)]、[識別プロファイルとユーザー (Identification Profiles and Users)]、[1つ以上の識別プロファイルを選択 (Select One or More Identification Profiles)]、[選択されたグループとユーザー (Selected Groups and Users)] など、ポリシーのパラメータを変更した場合、変更が有効になるまで数分かかります。

ポリシーのトラブルシューティング ツール：ポリシー トレース

- [ポリシー トレース ツールについて \(24 ページ\)](#)
- [クライアント要求のトレース \(24 ページ\)](#)
- [詳細設定：要求の詳細 \(25 ページ\)](#)

- [詳細設定：レスポンスの詳細の上書き \(26 ページ\)](#)

ポリシー トレース ツールについて

ポリシー トレース ツールはクライアント要求をエミュレートし、Web プロキシによる要求の処理方法を詳しく示します。Web プロキシの問題をトラブルシューティングするときに、このツールを使用し、クライアント要求を追跡してポリシー処理をデバッグできます。基本トレースを実行したり、詳細なトレース設定を行ってオプションをオーバーライドしたりできます。



(注) ポリシー トレース ツールを使用する場合、Web プロキシはアクセスログまたはレポートデータベース内の要求を記録しません。

ポリシー トレース ツールは、要求を Web プロキシだけで使用されるポリシーと照合して評価します。これらのポリシーには、アクセス、暗号化 HTTPS 管理、ルーティング、セキュリティ、発信マルウェア スキャンがあげられます。



(注) SOCKS および外部 DLP ポリシーは、ポリシー トレース ツールによって評価されません。

クライアント要求のトレース



(注) CLI コマンド `maxhttpheadersize` を使用して、プロキシ要求の最大 HTTP ヘッダー サイズを変更できます。この値を大きくすると、指定したユーザーが多数の認証グループに属しているか、または応答ヘッダーが現在の最大ヘッダーサイズよりも大きい場合に発生する可能性のあるポリシー トレースの失敗を軽減できます。このコマンドの詳細については、[Secure Web Appliance CLI コマンド](#) を参照してください。

ステップ 1 [システム管理 (System Administration)] > [ポリシー トレース (Policy Trace)] を選択します。

ステップ 2 [送信先 URL (Destination URL)] フィールドに、トレースする URL を入力します。

ステップ 3 (任意) 追加のエミュレーションパラメータを入力します。

エミュレート対象	入力
要求を行う際に使用されるクライアントの送信元 IP アドレス。	[クライアント IP アドレス (Client IP Address)] フィールドに IP アドレス。 (注) IP アドレスを指定しない場合、AsyncOS は localhost を使用します。また、SGT (セキュリティグループタグ) は取得できず、SGT に基づくポリシーは照合されません。

エミュレート対象	入力
要求を行う際に使用される認証/識別クレデンシャル。	<p>[ユーザー名 (User Name)] フィールドにユーザー名を入力し、[認証/識別 (Authentication/Identification)] ドロップダウン リストから [Identity Services Engine] または認証レルムを選択します。</p> <p>(注) イネーブルになっているオプションのみを使用できます。つまり、認証オプションと ISE オプションは、両方がイネーブルになっている場合にのみ使用できます。</p> <p>ここで入力するユーザーに対して認証が機能するためには、ユーザーがあらかじめ Secure Web Applianceを介して正常に認証されている必要があります。</p>

ステップ 4 [一致するポリシーの検索 (Find Policy Match)] をクリックします。

ポリシー トレースの出力が [結果 (Results)] ペインに表示されます。

(注) [HTTPSを通過 (Pass Through HTTPS)] トランザクションでは、ポリシー トレース ツールはさらにスキャンをバイパスし、トランザクションにアクセスポリシーは関連付けられません。同様に、[HTTPSを復号化 (Decrypt HTTPS)] トランザクションでは、ツールは実際にはトランザクションを復号化できず、適用されるアクセスポリシーを決定することができません。いずれの場合も、[ドロップ (Drop)] トランザクションの場合と同様、トレースの結果には「アクセスポリシー：適用なし (Access policy: Not Applicable) 」が表示されます。

(注) 指定されたクライアント IP アドレスがルーティングできない場合、トレース結果に「接続トレース：発信サーバーへの接続：失敗 (Connection Trace: Connection to Origin Server: Failed) 」と表示されます。

次のタスク

関連項目

- [詳細設定：要求の詳細 \(25 ページ\)](#)
- [詳細設定：レスポンスの詳細の上書き \(26 ページ\)](#)

詳細設定：要求の詳細

[ポリシー トレース (Policy Trace)] ページの [詳細設定 (Advanced)] セクションで、[要求の詳細 (Request Details)] ペインの設定項目を使用し、このポリシー トレース用に発信マルウェア スキャン要求を調整できます。

ステップ 1 [ポリシー トレース (Policy Trace)] ページの [詳細設定 (Advanced)] セクションを展開します。

ステップ 2 [要求の詳細 (Request Details)] ペインのフィールドを必要に応じて設定します。

詳細設定：レスポンスの詳細の上書き

設定	説明
プロキシポート (Proxy Port)	プロキシポートに基づいてポリシーメンバーシップをテストするトレース要求に対して、使用する特定のプロキシポートを選択します。
ユーザーエージェント (User Agent)	要求でシミュレートするユーザーエージェントを指定します。
要求の時間帯 (Time of Request)	要求でシミュレートする日付と時間帯を指定します。
ファイルのアップロード (Upload File)	要求でアップロードをシミュレートするローカルファイルを選択します。 ここでアップロードするファイルを指定する場合、Web プロキシは、GET 要求ではなく HTTP POST 要求をシミュレートします。
オブジェクトのサイズ (Object Size)	要求オブジェクトのサイズ (バイト単位) を入力します。キロバイト、メガバイト、またはギガバイトを表す、K、M、または G を入力できます。
MIME タイプ (MIME Type)	MIME タイプを入力します。
アンチマルウェア スキャンの判定 (Anti-malware Scanning Verdicts)	Webroot、McAfee、Sophos スキャンの判定をオーバーライドするには、オーバーライドする特定タイプの判定を選択します。

- ステップ 3** [一致するポリシーの検索 (Find Policy Match)] をクリックします。
 ポリシー トレースの出力が [結果 (Results)] ペインに表示されます。

詳細設定：レスポンスの詳細の上書き

[ポリシー トレース (Policy Trace)] ページの [詳細設定 (Advanced)] セクションで、[レスポンスの詳細の上書き (Response Detail Overrides)] ペインの設定項目を使用し、このポリシー トレース用に Web アクセス ポリシー レスポンスの аспек트를「調整」できます。

- ステップ 1** [ポリシー トレース (Policy Trace)] ページの [詳細設定 (Advanced)] セクションを展開します。
ステップ 2 [レスポンスの詳細の上書き (Response Detail Overrides)] ペインのフィールドを必要に応じて設定します。

設定	説明
URL カテゴリ (URL Category)	トレース応答の URL トランザクション カテゴリをオーバーライドするには、この設定を使用します。応答結果の URL カテゴリと置き換えるカテゴリを選択します。

設定	説明
アプリケーション (Application)	同様に、トレース応答のアプリケーションカテゴリをオーバーライドするには、この設定を使用します。応答結果のアプリケーションカテゴリと置き換えるカテゴリを選択します。
オブジェクトのサイズ (Object Size)	応答オブジェクトのサイズ (バイト単位) を入力します。キロバイト、メガバイト、またはギガバイトを表す、K、M、または G を入力できます。
MIME タイプ (MIME Type)	MIME タイプを入力します。
Webレピュテーションスコア (Web Reputation Score)	Webレピュテーションスコア (-10.0 ~ 10.0) を入力します。 Webレピュテーションスコアを 100 にすると、「スコアなし」を意味します。
アンチマルウェアスキャンの判定 (Anti-malware Scanning Verdicts)	これらのオプションを使用して、トレース応答で提供される特定のマルウェア対策スキャンの判定をオーバーライドします。応答結果の Webroot、McAfee、または Sophos のスキャン判定と置き換える判定を選択します。

ステップ 3 [一致するポリシーの検索 (Find Policy Match)] をクリックします。

ポリシー トレースの出力が [結果 (Results)] ペインに表示されます。

ファイルレピュテーションとファイル分析に関する問題

ファイルレピュテーションと分析のトラブルシューティングを参照してください

リブートの問題

- KVM で動作する仮想アプライアンスがリブート時にハングアップ (27 ページ)
- ハードウェアアプライアンス : アプライアンスの電源のリモートリセット (28 ページ)

KVM で動作する仮想アプライアンスがリブート時にハングアップ



(注) これは KVM の問題であり、状況によって異なる場合があります。

詳細については、<https://www.mail-archive.com/kvm@vger.kernel.org/msg103854.html> および <https://bugs.launchpad.net/qemu/+bug/1329956> を参照してください。

ステップ1 次の点をチェックします。

```
cat /sys/module/kvm_intel/parameters/enable_apicv
```

ステップ2 上記の値が Y に設定されている場合 :

a) 仮想アプライアンスを停止し、KVM カーネルモジュールを再インストールします。

```
rmmod kvm_intel modprobe kvm_intel enable_apicv=N
```

b) 仮想アプライアンスを再起動します。

ハードウェア アプライアンス : アプライアンスの電源のリモートリセット

始める前に

- IPMI バージョン 2.0 を使用してデバイスを管理できるユーティリティを取得し、設定します。
- サポートされている IPMI コマンドの使用方法を理解します。IPMI ツールのマニュアルを参照してください。

アプライアンスのハードリセットが必要な場合は、サードパーティの Platform Management (IPMI) ツールを使用してアプライアンス シャーシをリモートからリブートできます。

制約事項

- リモート電源管理は、特定のハードウェアでのみ使用できます。詳細については、[リモート電源再投入の有効化](#)を参照してください。
- この機能を使用する場合は、使用が必要になる前に、あらかじめ有効にしておく必要があります。詳細は、[リモート電源再投入の有効化](#)を参照してください。
- 以下の IPMI コマンドだけがサポートされます : `status`、`on`、`off`、`cycle`、`reset`、`diag`、`soft`。サポートされていないコマンドを発行すると、「権限不足」エラーが発生します。

ステップ1 IPMI を使用して、必要なクレデンシャルと共に、先に設定したリモート電源管理ポートに割り当てられた IP アドレスに、サポートされている電源の再投入コマンドを発行します。

たとえば、IPMI をサポートする UNIX タイプのマシンからは、次のようなコマンドを発行します。

```
ipmitool -I lan -H 192.0.2.1 -U remoteresetuser -P passphrase chassis power reset
```

S195、S395、および S695 モデルの場合は、次を使用します。

```
ipmitool -I lanplus -H 192.0.2.1 -U remoteresetuser -P password chassis power reset
```

ここで 192.0.2.1 は、リモート電源管理ポートに割り当てられた IP アドレスであり、`remoteresetuser` および `passphrase` は、この機能を有効にしたときに入力したクレデンシャルです。

ステップ2 アプライアンスが再起動されるまで、少なくとも 11 分間待ちます。

サイトへのアクセスに関する問題

- [認証をサポートしていない URL にアクセスできない \(29 ページ\)](#)
- [POST 要求を使用してサイトにアクセスできない \(29 ページ\)](#)
- 次のセクションも参照してください。 [特定 Web サイトの復号化のバイパス \(12 ページ\)](#)

認証をサポートしていない URL にアクセスできない

以下は、認証をサポートしていないため、Secure Web Applianceが透過モードで展開されている場合に使用できないアプリケーションのリストの一部です。

- Mozilla Thunderbird
- Adobe Acrobat アップデート
- HttpBridge
- CollabNet の Subversion
- Microsoft Windows アップデート
- Microsoft Visual Studio

回避策：認証を必要としない URL のユーザー クラスを作成します。

関連項目

- [認証のバイパス](#)

POST 要求を使用してサイトにアクセスできない

ユーザーの最初のクライアント要求が POST 要求で、ユーザーの認証が必要な場合、POST 本文のコンテンツは失われます。この問題は、アクセス コントロールのシングルサインオン機能を使用しているアプリケーションに対して POST 要求を行った場合に発生することがあります。

回避策：

- 最初の要求として POST を使用する URL に接続する前に、ブラウザから別の URL を要求して、最初に Web プロキシでユーザーを認証させます。
- 最初の要求として POST を使用する URL の認証をバイパスします。



(注) アクセス コントロールを使用すると、アプリケーション認証ポリシーで設定された Assertion Consumer Service (ACS) URL の認証をバイパスできます。

関連項目

- [認証のバイパス](#)。

アップストリーム プロキシに関する問題

- [アップストリーム プロキシが基本クレデンシャルを受け取らない \(30 ページ\)](#)
- [クライアント要求がアップストリーム プロキシで失敗する \(30 ページ\)](#)

アップストリーム プロキシが基本クレデンシャルを受け取らない

アプライアンスとアップストリームプロキシの両方がNTLMSPPPによる認証を使用している場合、設定によっては、アプライアンスとアップストリームプロキシで、認証クレデンシャルを要求する無限ループが発生する可能性があります。たとえば、アップストリームプロキシでは基本認証が必要だが、アプライアンスではNTLMSPPP 認証が必要な場合、アプライアンスはアップストリーム プロキシに正常に基本認証クレデンシャルを渡すことができません。これは、認証プロトコルの制限によるものです。

クライアント要求がアップストリーム プロキシで失敗する

設定：

- Secure Web Applianceとアップストリーム プロキシ サーバが基本認証を使用している。
- ダウンストリームの Secure Web Applianceでクレデンシャルの暗号化がイネーブルになっている。

Web プロキシはクライアントから「Authorization」HTTP ヘッダーを受信しますが、アップストリーム プロキシサーバーでは「Proxy-Authorization」HTTP ヘッダーが必要であるため、クライアント要求はアップストリーム プロキシで失敗します。

アップストリーム プロキシ経由で FTP 要求をルーティングできない

ネットワークにFTP接続をサポートしていないアップストリームプロキシが含まれる場合は、すべてのIDに適用され、かつFTP要求にのみ適用されるルーティングポリシーを作成する必要があります。ルーティングポリシーを設定して、FTPサーバーに直接接続するか、プロキシのすべてがFTP接続をサポートしているプロキシグループに接続します。

仮想アプライアンス

- AsyncOS の起動中に強制リセット、電源オフ、リセットのオプションを使用しないでください (31 ページ)
- KVM 展開でネットワーク接続が最初は機能するが、その後失敗する (31 ページ)
- KVM 展開におけるパフォーマンスの低下、ウォッチドッグ問題、および高 CPU 使用率 (31 ページ)
- Linux ホスト上で実行されている仮想アプライアンスの一般的なトラブルシューティング (32 ページ)

AsyncOS の起動中に強制リセット、電源オフ、リセットのオプションを使用しないでください

仮想ホストにおける以下の操作は、ハードウェアアプライアンスのプラグを抜くことと同等であり、特に AsyncOS の起動中ではサポートされていません。

- KVM の強制リセットオプション。
- VMware の電源オフとリセットオプション。(これらのオプションは、アプライアンスが完全に起動してから安全に使用できます)。

KVM 展開でネットワーク接続が最初は機能するが、その後失敗する

問題

前回の作業後にネットワーク接続が失われる。

解決方法

これは KVM の問題です。OpenStack ドキュメントの「KVM: Network connectivity works initially, then fails」の項を参照してください。このドキュメントは、http://docs.openstack.org/admin-guide-cloud/content/section_network-troubleshoot.html にあります。

KVM 展開におけるパフォーマンスの低下、ウォッチドッグ問題、および高 CPU 使用率

問題

Ubuntu 仮想マシン上で実行しているときに、アプライアンスのパフォーマンスが低下して、ウォッチドッグの問題が発生し、アプライアンスが異常に高い CPU 使用率を示す。

解決方法

Ubuntu から最新の Host OS アップデートをインストールしてください。

Linux ホスト上で実行されている仮想アプライアンスの一般的なトラブルシューティング

問題

KVM 展開で実行されている仮想アプライアンスに関する問題は、ホスト OS の設定の問題と関連している可能性があります。

解決方法

『*Virtualization Deployment and Administration Guide*』のトラブルシューティングに関するセクションおよびその他の情報を参照してください。このドキュメントは、

https://access.redhat.com/documentation/en-US/Red_Hat_Enterprise_Linux/7/pdf/Virtualization_Deployment_and_Administration_Guide/Red_Hat_Enterprise_Linux-7-Virtualization_Deployment_and_Administration_Guide-en-US.pdf [英語] から入手できます。

WCCP に関する問題

- [最大ポート エントリ数 \(32 ページ\)](#)

最大ポート エントリ数

WCCP を使用している展開では、HTTP、HTTPS、および FTP の各ポートの合計 30 が最大ポート エントリ数になります。

パケットキャプチャ

- [パケット キャプチャの開始 \(33 ページ\)](#)
- [パケット キャプチャ ファイルの管理 \(34 ページ\)](#)

アプライアンスでは、アプライアンスが接続されているネットワークで送受信される TCP/IP と他のパケットをキャプチャして表示できます。



(注) パケット キャプチャ機能は UNIX の `tcpdump` コマンドに似ています。

Secure Web Appliance は、NIC ペアリングインターフェイスのパケットキャプチャをサポートしていません。パケットキャプチャは、アクティブなインターフェイスにのみ適用されます。たとえば、P1 と P2 の両方がペアになっている場合、P1 と P2 のどちらもユーザーインターフェイスまたは CLI で設定されません。

パケットキャプチャの開始

ステップ1 [ヘルプとサポート (Help and Support)] > [パケットキャプチャ (Packet Capture)] を選択します。

ステップ2 (任意) [設定の編集 (Edit Settings)] をクリックし、パケットキャプチャの設定を変更します。

オプション	説明
キャプチャファイルサイズ制限 (Capture File Size Limit)	キャプチャファイルを拡大できる最大サイズを指定します。[キャプチャ期間 (Capture Duration)] が [ファイルサイズの上限に達するまでキャプチャを実行 (Run Capture Until File Size Limit Reached)] に設定されていない場合は、上限に達すると、データが破棄されて新しいファイルが開始されます。
キャプチャ期間 (Capture Duration)	<p>キャプチャを自動的に停止するとき (および場合) のオプション。次から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ファイルサイズの上限に達するまでキャプチャを実行 (Run Capture Until File Size Limit Reached)]。キャプチャはファイルサイズの上限に達するまで実行されます。 • [制限時間に達するまでキャプチャを実行 (Run Capture Until Time Elapsed Reaches)]。キャプチャは指定された期間だけ実行されます。単位を指定せずに時間の長さを入力すると、AsyncOS は、デフォルトで秒を使用します。 • [制限なしでキャプチャを実行 (Run Capture Indefinitely)]。パケットキャプチャは、手動で停止するまで実行されます。 <p>(注) キャプチャは手動でいつでも終了できます。</p>
インターフェイス	トラフィックがキャプチャされるインターフェイス。
フィルタ (Filters)	<p>パケットをキャプチャするときに適用するフィルタリングオプション。フィルタリングを使用すると、必要なパケットだけをキャプチャできます。次から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [フィルタなし (No Filters)]。すべてのパケットがキャプチャされます。 • [事前定義されたフィルタ (Predefined Filters)]。定義済みのフィルタを使用して、ポートやIPアドレスによりフィルタリングできます。何も指定しなかった場合は、すべてのトラフィックがキャプチャされます。 • [カスタムフィルタ (Custom Filter)]。必要なパケットキャプチャオプションの正確な構文がわかっている場合は、このオプションを使用します。標準の tcpdump 構文を使用します。

(任意) パケットキャプチャの変更を送信して確定します。

(注) 変更内容をコミットせずにパケットキャプチャ設定を変更し、パケットキャプチャを開始する場合、AsyncOS は新しい設定を使用します。これにより、今後のパケットキャプチャの実行に対する設定を適用せずに現在のセッションで新しい設定を使用することができます。この設定は、クリアするまで有効なままになります。

ステップ3 [キャプチャを開始 (Start Capture)]をクリックします。実行中のキャプチャを手動で停止するには、[キャプチャを停止 (Stop Capture)]をクリックします。

パケットキャプチャファイルの管理

アプライアンスは、取り込んだパケットアクティビティをファイルに保存し、そのファイルをローカルに格納します。デバッグやトラブルシューティングのために、FTPを使用してパケットキャプチャファイルをシスコカスタマーサポートに送信できます。

- [パケットキャプチャファイルのダウンロードまたは削除 \(34 ページ\)](#)

パケットキャプチャファイルのダウンロードまたは削除



(注) また、FTP を使用してアプライアンスに接続し、captures ディレクトリからパケットキャプチャファイルを取り出すこともできます。

ステップ1 [ヘルプとサポート (Help and Support)]>[パケットキャプチャ (Packet Capture)]を選択します。

ステップ2 [パケットキャプチャファイルの管理 (Manage Packet Capture Files)]ペインから、使用するパケットキャプチャファイルを選択します。このペインが表示されない場合は、アプライアンスにパケットキャプチャファイルが保存されていません。

ステップ3 必要に応じて、[ファイルのダウンロード (Download File)]または[選択ファイルの削除 (Delete Selected File)]をクリックします。

サポートの使用

- [効率的なサービス提供のための情報収集 \(34 ページ\)](#)
- [テクニカルサポート要請の開始 \(35 ページ\)](#)
- [仮想アプライアンスのサポートの取得 \(35 ページ\)](#)
- [アプライアンスへのリモートアクセスのイネーブル化 \(36 ページ\)](#)

効率的なサービス提供のための情報収集

サポートに問い合わせる前に以下の手順を実行してください。

- [一般的なトラブルシューティングとベストプラクティス \(1 ページ\)](#) の説明に従い、カスタム ログのフィールドを有効にします。
- パケットキャプチャを実行することを検討してください。 [パケットキャプチャ \(32 ページ\)](#) を参照してください。

テクニカル サポート要請の開始

始める前に

- 自身の Cisco.com ユーザー ID がこのアプライアンスのサービス契約に関連付けられていることを確認します。Cisco.com プロファイルに現在関連付けられているサービス契約の一覧を参照するには、Cisco.com Profile Manager (<https://sso.cisco.com/auth/forms/CDClogin.html>) にアクセスしてください。Cisco.com のユーザー ID がない場合は、登録して ID を取得してください。

緊急ではない場合は、アプライアンスを使用してサポート要請をシスコ カスタマー サポートに送信できます。アプライアンスは要請を送信する際に、アプライアンスの設定も送信します。サポート要求を送信するには、アプライアンスがインターネットに電子メールを送信できる必要があります。



(注) 緊急の問題がある場合は、Cisco Worldwide Support Center に連絡してください。

ステップ 1 [ヘルプとサポート (Help and Support)]>[テクニカルサポートに問い合わせる (Contact Technical Support)] を選択します。

ステップ 2 (任意) 要請のその他の受信者を選択します。デフォルトでは、サポート要請とコンフィギュレーションファイルがシスコ カスタマー サポートに送信されます。

ステップ 3 自身の連絡先情報を入力します。

ステップ 4 問題の詳細を入力します。

- この問題に関するカスタマー サポート チケットをすでに持っている場合は、それを入力してください。

ステップ 5 [送信 (Send)] をクリックします。トラブル チケットがシスコで作成されます。

仮想アプライアンスのサポートの取得

Cisco Content Security 仮想アプライアンスのサポート ケースを報告する場合は、仮想ライセンス番号 (VLN) 、契約番号、および製品 ID コード (PID) を提供する必要があります。

発注書を参照するか以下の表を使用すると、仮想アプライアンスで動作中のソフトウェアライセンスに基づく PID を特定できます。

機能	PID	説明
Web Security Essentials	WSA-WSE-LIC=	内容 : <ul style="list-style-type: none"> • Web Usage Controls • Web レピュテーション

機能	PID	説明
Web Security Premium	WSA-WSP-LIC=	内容 : <ul style="list-style-type: none"> • Web Usage Controls • Web レピュテーション • Sophos および Webroot Anti-Malware シグネチャ
Web Security Anti-Malware	WSA-WSM-LIC=	Sophos および Webroot Anti-Malware シグネチャが含まれます。
McAfee Anti-Malware	WSA-AMM-LIC=	—
Secure Endpoint	WSA-AMP-LIC=	—

アプライアンスへのリモートアクセスのイネーブル化

[リモートアクセス (Remote Access)] オプションを使用すると、シスコ カスタマー サポートがサポートのためにリモート アプライアンスにアクセスできるようになります。

ステップ 1 [ヘルプとサポート (Help and Support)] > [リモートアクセス (Remote Access)] を選択します。

ステップ 2 [有効 (Enable)] をクリックします。

ステップ 3 [カスタマーサポートのリモートアクセス (Customer Support Remote Access)] オプションを設定します。

オプション	説明
シード文字列 (Seed String)	文字列を入力する場合は、その文字列が既存または将来のパスフレーズと一致しないようにしてください。 [送信 (Submit)] をクリックすると、文字列がページの上部に表示されます。 この文字列をサポート担当者に提出します。
セキュア トンネル (Secure Tunnel) (推奨)	リモート アクセス接続にセキュア トンネルを使用するかどうかを指定します。 このオプションがイネーブルの場合、アプライアンスは、指定されたポートからサーバー upgrades.ironport.com への SSH トンネルを作成します (デフォルトでは、ポート 443)。接続が確立されると、シスコカスタマーサポートは SSH トンネルを使用してアプライアンスにアクセスできるようになります。 techsupport トンネルがイネーブルになると、 upgrades.ironport.com に 7 日間接続されたままになります。7 日が経過すると、 techsupport トンネルを使用して新しい接続を作成できなくなりますが、既存の接続は存続し、機能します。 リモートアクセスアカウントは、明確に非アクティブ化されるまでアクティブな状態を維持します。

オプション	説明
送信元インターフェイス (Source Interface)	トンネルとリモートアクセス接続の確立に使用するインターフェイスを選択できません。
アプライアンスシリアル番号	アプライアンスのシリアル番号。

ステップ 4 変更を送信し、保存します。

ステップ 5 ページ上部近くに表示される成功メッセージでシード文字列を検索し、書き留めます。

セキュリティ上の理由から、この文字列はアプライアンスに保存されず、後から文字列を確認する方法はありません。

安全な場所にこのシード文字列を保存します。

ステップ 6 シード文字列をサポート担当者に提出します。

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。